園長通信～こころ～ №８４

窓

2024.8.5

「窓」この言葉は、いろいろなタイトルに使われることが多い。私の場合であれば、「国語科通信」のタイトルとなった。この「国語科通信～窓～」のことは、３月まで出していた「校長室だより～燦燦～」に、何度か取り上げたことがある。

教員になり、学級通信や部活動通信などを出していた。だが、国語の授業に関する国語科通信は出していなかった。正確には、出そうとは思ったが、出せずにいた。すでに、３０代後半になろうとしていた。一念発起というわけではなかったが、ようやく国語科通信に挑むことにした。毎日、学級通信を出しながら、国語科通信も出していくというのは、そう簡単なことではない。これを出すことは、もはや憧れとも言えるものだった。何に憧れたのか。それが、大村はま先生の国語教室通信である。大村先生のようにはいかないが、出してみたかったのである。

始めた以上は、途中で挫折というわけにはいかない。やってみると、意外と続けることができた。国語の授業にもよかった。あの当時は、４クラスの国語を担当していた。国語科通信が、４クラスの交流の場となるという一面もあった。

毎号出すたびに、５０部ずつ余計に印刷をしておいた。後で製本するためである。当時、お世話になっていた学校を去るタイミングで、国語の授業からも離れることとなった。おびただしい印刷物は、とりあえずダンボールに収められた。それから、１０年以上の時が経過した。激しい揺れに負ける形で、書斎の本棚が倒れ、書物が散乱した。仕方なく片付けを始めた。すると、例のダンボールが姿を現した。そろそろ本にするか。ここからは、早かった。表紙をつくり、印刷会社に連絡をして、５０部作製した。ようやく出来上がった。もう何年越しなのかも分からない。まずは、知り合いの先生方にプレゼントした。気づくと、３０部以上が残されていた。それだけ、自分が国語の世界から遠ざかってしまったということである。

再び、月日が流れた。退職の時期を迎えた。荷物を整理していたところ、ダンボールに収められた「国語科通信～窓～」が出てきた。さて、どうしたらよいものか。せっかく製本してあるのに、もったいない。その一方で、今読み返すと、内容が充実しているとも言えない。とても人にぜひ読んでくださいと言えるような代物ではなかった。困った。

ここで、一つのアイディアが浮かんだ。毎年、夏休みに入ると、福島地区中学校教育研究会国語部会が開かれる。私も、長きにわたりお世話になってきた。国語教員として育てていただいた。この会には、福島地区の国語の先生方が参加するようになる。ここで、「窓」を配布してもらうことにした。もちろん、国語部長の校長先生の許可を得なければならない。お願いしたところ、快く了解していただけた。お陰様で、ようやく我が家から「窓」がなくなった。この冊子が、先生方のお役に立てるのか、甚だ不安ではある。少しでも、何らかの参考になってくれればと願うばかりである。思えば、世に出るために、ずいぶんと月日を費やした「国語科通信～窓～」だった。